様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：８２６２０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１２９

研究課題名（和文）螺鈿のアジア史ー技術史と交流史を中心にー

研究課題名（英文）Mother-of-Pearl Inlays in the History of Asia: History of the Technique and of Mutual Influences

研究代表者
小林　公治（Kobayashi, Koji）

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・その他部局等・室長

研究者番号：７０１９５７７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究ではアジア螺鈿史の全体像把握理解を目的として各地での作品や工房調査を行い、成果公表に努めた。
　調査はアジアや欧米各地において精力的に実施し、印刷物やウェブ・データでは分からない詳細な技術や文様情報などを確認した。主な成果として、中国唐代装飾鏡の検討により、貝の切断工具が糸鋸では無かった可能性や漆と自然樹脂とが充填する厚さで使い分けられた可能性などを論じた。朝鮮半島螺鈿の貝加工技術についての検討では、朝鮮時代前中期頃に貝種の交替や文様作成技術の変化が生じたらしきことなどを検討した。また南蛮漆器書見台を中心に調査分析を行い、未だ定見の無い南蛮漆器の編年や実年代検討に一つの見通しを提示した。

研究成果の概要（英文）：For the main aim of this study; understanding total history of mother-of-pearl inlay in Asia, this author has researched mother-of-pearl inlay objects and making technique and tried to present its result as soon as possible.
The author conducted research by this grant in Asian countries and also in the US and European countries. Some of these research results are as followings; 1) Consideration about cutting technique of shell and the reason why Urushi or natural resin was chosen for making ornamented mirrors in the Tang dynasty. 2) Consideration about some important technical changes, such as shell kinds change or technical change for making curved shell line or others, which might be occurred in the former or middle Chosun dynasty. 3) Submission of working hypothesis about Japanese Export Lacquer chronology, generally called as Namban lacquer through lecterns in the Momoyama age, which were mostly made in former half of the 17th century.

研究分野：物質文化史

キーワード：螺鈿史　アジア　対外交流史　技術　漆　樹脂　象嵌　mother of pearl

１．研究開始当初の背景

（１）螺鈿とは、貝の光沢を装飾に利用した技術と器物の総称である。

アジアの螺鈿はメソポタミア文明および中国文明殷代の遺品をその最古の事例とするが、その後の形跡は不明となる。現代まで続く東方アジア（東南アジア以東）螺鈿の直接的起源は、正倉院や出土資料などに比較的多くの遺品が残っており、基本的な螺鈿制作技術（木地螺鈿・漆地螺鈿・樹脂地螺鈿・玳瑁地螺鈿）が出そろう唐代にあると考えられる。つまり、こうした唐代の螺鈿基本技術成立は、中国は無論のこと、朝鮮半島や日本、またベトナムやタイなどユーラシア大陸東方のアジア各地で以後発展する様々な螺鈿の母体となったと考えるものである。

（２）過去、アジアの螺鈿についての研究は、日本を中心に進められてきた。これは日本、中国、また朝鮮半島で造られた優れた螺鈿遺品が、漆工品の一端として寺社や大名家などを中心に多数伝えられてきたことに大きな要因があると思われるが、その結果、螺鈿史の研究は、遺存している優品を対象とした漆工史の一部としての美術史的研究が中心となっており、日本には作例が伝世しなかった東南アジアや南アジア、さらには西アジアなどについては研究はおろか、関心の埒外に置かれることとなった。従って当然ながら、こうした地域の螺鈿史研究は進んでおらず、どの地域にいつ、どのような螺鈿が存在するのか、まずその実態調査から行う必要がある。また比較的研究が進んでいるとは言え、日中韓の東アジア三地域の螺鈿研究もその研究は少ないのが実情であり、製作地や時代また編年といった基本的な理解さえも今なお進んでいるとは言い難い。

２．研究の目的

上記のように、これまでの螺鈿史研究は関心に地域的また時代的偏りがあり、基礎的な情報収集すらほとんど行えていない地域が多い。しかし初めに述べたように、アジア各地の螺鈿を単独あるいは少数起源説の立場に立って理解しようとすると、これまでの研究視野では不十分であることに気づく。東南アジアや南アジア、さらに西アジアなど、以前には研究対象とはほとんど見做されて来なかった地域についても広く関心を持って検討する必要があるのはもちろん、東アジア三地域の螺鈿史についてもより詳細な研究を進めることが求められている。

本研究では、こうした研究実態を踏まえ、従来の美術史的研究手法に加え、これもまたこれまで十分に検討されたとは言えない技術史的視点を中心にして、アジア全体に広がる各地の螺鈿史実態の把握に努めること、そしてそれを基にした総合的螺鈿史（どこで、いつ、どのような様式・技術の螺鈿が制作されたのか）を構築すること、さらに螺鈿を通じた各時代の地域間交流関係史を解明することを大きな目的としている。

こうした目的の下、ここでは特に中国螺鈿技術のより詳しい理解、東アジアにおける螺鈿貝種の特定と変遷についての検討、中国と東南アジア、また東南アジア地域内の相互関係検討、南アジア以西の螺鈿実態・様相の把握、といった問題について調査や分析研究を実施した。

３．研究の方法

本研究の主な方法としては、博物館や美術館等が所蔵する過去の作例の詳細な実見観察と、各地の螺鈿工房などにおける制作技術調査という大きく二つの方法がある。

前者はかつて造られた螺鈿の実相を知るためのほぼ現状唯一の手段である。これまで発刊された各種の著作物、博物館や美術館の図録などを渉猟し調査を行うべき作例の所蔵者を特定、そうした機関や個人などとのコンタクトを取り、調査の許可や調査日の調整を行ったうえで実際の調査を実施する。調査の準備として重要なことは、できる限り事前の検討で観察項目・注目点などをある程度決定しておき、さらにそれをデジタル調書書式などとしてまとめておくことである。こうした準備により、時間の限られた現地調査の効率化や項目の見落としなどを減らす無駄の少ない調査が可能となる。

螺鈿作例の所蔵者確認で特に問題となるのは、個人が所蔵している作例については所蔵者の特定はかなり難しいこと、またかつての所蔵者が手放しており、現在の所蔵者が不明となっているケースが少なくないことである。また、博物館等が所蔵者である場合、コンタクトを取るのは比較的容易であるが、教会といった施設の場合は現地の仲介者に依頼するといった迂遠な方法を迫られることが多くなる。

後者は過去の作例に観察される諸技術特徴が実際にどのような技術で制作されたのかを知るための重要な方法である。

なお、工芸一般に言える特徴でもあるが、螺鈿器には紀年銘を伴うものは極めて少ないため、作品の正確な年代を押さえることが難しい。したがって、使用者や制作の経緯を伝える作例なども加えてその年代などを検討することが必要となるが、その年代信頼精度は相対的に落ちるため、当該作例の様式や技術的観点も交えた慎重な検討が求められることになる。

４．研究成果

ここでは、3 か年に亘って行った各地での調査と、発表を行った成果について、以下年度別に記したい。

（１）平成 24 年度は、高麗時代螺鈿器を中心とした朝鮮半島螺鈿漆器の調査を日本国内各地の所蔵機関（東京国立博物館・高麗

美術館・大和文華館・奈良国立博物館・北村美術館）および個人宅で実施し、琉球螺鈿漆器作例および制作技術に関する調査を沖縄県内各地（浦添市美術館・沖縄県工業技術支援センター・首里城公園・古美術店・螺鈿工房 2 か所）で行った。また室町時代螺鈿鞍の調査を愛知県菟足神社にて行い、日本の近世輸出螺鈿漆器の調査を日本国内各機関（南蛮文化館・逸翁美術館・岐阜市歴史博物館・個人宅）にて、海外ではスペイン・ポルトガル国内の諸機関・個人宅にて行った。この他、中国清代の輸出螺鈿漆器類調査をシンガポール・マレーシア国内諸機関で、またこれまで国内外でほとんど知られていないカンボジア（クメール）螺鈿の調査を同国内で行った上で、さらにタイでの調査と比較検討した。

こうした調査によって得られた成果の一部については、ドイツ・ミュンスターの漆工芸博物館（Museum für Lackkunst）でヨーロッパ初の特別展として開催された朝鮮螺鈿漆器展覧会図録の論文として公表し（下記雑誌論文③）、また唐代螺鈿器制作技術についての検討結果を下記雑誌論文②として発表した。

その成果内容であるが、③の論文では、高麗時代から朝鮮時代にかけての螺鈿漆器に使われた技術について、螺鈿貝片を中心に検討し、朝鮮時代前期頃の貝種交替、切り取り技術と工具、半島独自とされる詳絲（サンサ）技法による時期判断の可能性などについて論述した。

②の論文では、日本や中国で伝世、あるいは出土した唐代の螺鈿鏡と平脱鏡について特に技術史的な視点から比較検討し、当時の貝片切り取り技術と工具、またこれら二種の装飾鏡構造からうかがわれる素地充填剤としての漆と自然樹脂との使い分けの問題（図１）について検討した。

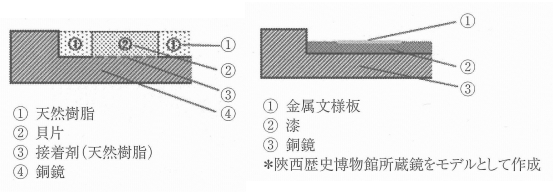

図１ 螺鈿鏡（左）と平脱鏡（右）の構造比較

（２）平成 25 年度は、滋賀県内・愛知県内・宮城県内の博物館・美術館・資料館等の各機関で日本に所在する中国や朝鮮半島など、アジア各地の螺鈿器調査を実施したほか、特に螺鈿を中心的対象として取り上げた特別展の調査を行った。また海外では、マドリードで開催された、スペイン国内に伝世された日本製輸出螺鈿漆器（南蛮漆器）を集成した特別展の調査を行ったほか、ポルトガル国内各地（リスボン・ポルト・マデイラ諸島ほか）にて日本製輸出螺鈿漆器を中心とした調査を行い、アムステルダムで朝鮮半島の螺鈿漆器などの調査を実施した。さらにこれまで数回にわたる調査依頼を行っていた、2 例のみの存在が確認されている中国、五代十国期の螺鈿漆器の一点について蘇州で実見調査を行ったほか、部外者の実見をほとんど許可していない、中国の現在の螺鈿制作技術の一つである点螺技法について揚州にて調査を実施した。また不明点が多い中国の木地螺鈿について寧波の工房での調査も実施した。この他、これまで実施ができなかった西アジアの螺鈿実態について、トルコにおいていくつかの宮殿に所蔵されている近代螺鈿器やシリアから導入されたと伝えられる木地螺鈿などの工房調査をイスタンブールやガジアン・テプにて行った。

こうした調査で得られた成果の一部については、アメリカのバッファロー・ニューヨーク州立大学で開催されたアジアの漆国際シンポジウムにおいて発表した（下記学会発表⑤）。

この学会発表⑤においては、これまで 19 世紀頃から発達する日本製の輸出螺鈿漆器はひとえに長崎製と考えられてきたが、当時類似の螺鈿漆器を制作していた場所は、長崎だけでなく、駿府（静岡）や横浜などもあること、そしてそれらの土地で造られた特徴的な作品の解説と、また現在も横浜にわずかに伝えられている伝統技術についての紹介を行った。

（３）平成 26 年度は、国内では沖縄県浦添市美術館にて、朝鮮半島や中国との強い影響関係が考えられる沖縄製の可能性が高い螺鈿漆器数点の調査を行った。また海外ではトルコにおいてイスタンブール市内の博物館での調査および螺鈿工房にて制作者の様式認識と実際の作例や技法との関係について調査を行い、製作地や様式伝来の可能性、トルコの螺鈿史などについて調査・検討した。イスラエルでは、エルサレム市内の教会・博物館などにおいてパレスチナやシリアの螺鈿器調査を行い、パレスチナ螺鈿の製作地であるベツレヘムにおいて螺鈿工房調査を行った。また、イタリアおよびスペイン国内各地では、日本製輸出螺鈿漆器およびそれに類した製作地不明螺鈿器、特に書見台を中心とした調査を実施した。そして中国では、浙江省博物館にて新しく寄贈された中国製螺鈿漆器の調査を行い中国側研究者と意見交換を実施し、湖州において唯二例中の一である五大十国期螺鈿経箱を実見した。また寧波の工房にて中国木地螺鈿技術の調査を実施した。

前年までに実施したものを含めたこうした調査成果の一部については、『美術研究』413 号に展覧会評として報告（下記雑誌論文①）したほか、東京文化財研究所企画情報部研究会にて「南蛮漆器書見台編年試論」というテーマで発表し（下記学会発表①）、また浦添市で開催された第 5 回琉球の漆文化と科学 2014 においてポスター発表により報告（下

記学会発表②・③・④）を行った。
　平成 26 年度の成果のうち雑誌論文①は、2013 年にマドリードおよび仙台で開催された桃山時代輸出螺鈿漆器（南蛮漆器）を中心テーマとして扱った二つの展覧会を取り上げ、その内容の紹介と展覧会開催の意義について述べた。また学会発表①においてはやはり南蛮漆器、特に書見台を取り上げ、これまでに日本国内やポルトガルなどで行った調査結果やこの年にスペイン各地で実施した書見台を中心とした調査結果に基づき、これまで時期編年が確立されていない南蛮漆器書見台の変遷とその実年代についての検討結果を発表した。浦添市で開催された、第 5 回琉球の漆文化と科学 2014 では、25 年度と 26 年度に行ったトルコでの調査結果に基づいて、トルコではどのような螺鈿器が造り使われてきたのか、またその分類についての発表（下記学会発表②）、それまでのヨーロッパ各地での調査や 26 年度に行ったイスラエルでの調査結果をもとにパレスチナで造られた螺鈿器の歴史と内容についてまとめた発表（下記学会発表③）、また制作のかたわら、沖縄で琉球王国時代の螺鈿技術について実際的な復元研究を行っている螺鈿制作者らと共同して、往時の螺鈿貝片制作技術復元についての発表（下記学会発表④）を行った。

　なお、本科学研究費助成で行った調査および検討結果については、以後も引き続き検討・発展させ、随時論文、講演・発表、シンポジウム、報告等によって成果を積極的に公表していく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 小林　公治、2013 年開催の南蛮漆器に関する展覧会から―Lacas Namban 展（マドリード）と「伊達政宗の夢」展（仙台）―、美術研究、査読無、413 号、2014、pp.43－51

② 小林　公治、唐代螺鈿鏡・平脱鏡制作技術に関する検討―螺鈿史研究の視点から―、岡内三眞編、技術と交流の考古学、同成社、査読無、2013、pp.74－85

③ Koji Kobayashi, Turban Snails and Abalone Shells ―The technique of mother-of-pearl inlay on the Korean peninsula―, Patricia Frick and Soon-ChimJung eds., *Korean Lacquer Art ― Aesthetic Perfection*, Hirmer Verlag, 査読無、2012、pp.72－83

〔学会発表〕（計５件）
① 小林　公治、南蛮漆器書見台編年試論、東京文化財研究所企画情報部研究会、東京文化財研究所、2014 年 12 月 9 日

② 小林　公治、トルコの螺鈿―本格調査に向けた予備的検討―、第 5 回琉球の漆文化と科学 2014、浦添市てだこホール、2014 年 11 月 15 日

③ 小林　公治、パレスチナの螺鈿―その特徴と歴史に関する予察―、第 5 回琉球の漆文化と科学 2014、浦添市てだこホール、2014 年 11 月 15 日

④ 宮城　清、小林　公治、宮里　正子、琉球王国時代の螺鈿漆器制作技術を探る―雲龍黒漆螺鈿盆の復元を通じた素材貝片の検討―、第 5 回琉球の漆文化と科学 2014、浦添市てだこホール、2014 年 11 月 15 日

⑤ Koji Kobayashi, Ikuhiko Akabori, Sumpu and Yokohama Aogai-zaiku ―Introduction of unknown Nagasaki Style Mother-of-Pearl Inlay Lacquer―, Asian Lacquer Symposium, Buffalo State College. State University of New York, 2013 年 5 月 22 日

〔図書〕（計２件）
① 小林　公治他、同成社、技術と交流の考古学、2013、734

② Koji Kobayashi 他、Hirmer Verlag, *Korean Lacquer Art ― Aesthetic Perfection*, 2012, 208

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　公治（KOBAYASHI, Koji）
東京文化財研究所・その他部局等・室長
研究者番号：７０１９５７７５